

## 「十五少年漂流記」

子供の頃読んだ小説を大人になって読むとどんな風を感じるのか、「十五少年漂流記」を読んできた。

フランスのSF作家として有名なジュール・ベルヌの作品であるが、この作品はいわゆるサバイバル物である。設定上は、主人公たちが少年であることと、人数としてはやや多めの十五人がまとめて漂流したところが特徴となっている。

作品中で少年たちは子供とは思えないほどの能力を発揮し生き抜いていくので、むしろ主人公は大人の設定にしたほうが自然なぐらいであるのに、なぜ少年たちとしたのだろうか。子供向け作品だから子供を主人公にしたとか、少年の成長を描きたかったとか、困難さを強調して読者をハラハラさせるためとかもあるかもしれない。しかし、少年たちは最初から十分大人だし、また、作者は読者をハラハラさせようとはあまり思っていないように思える。なぜならば、原題が「Deux Ans Vacances」（二年の休暇）、である。つまり読者に最初から二年で帰れることを教えてしまっているからである。

そこで私は、作者は純粹にサバイバルを描きたかったのではないかと考える。大人が十五人も集まれば、権力闘争や恋愛問題が絡んで、焦点がぼやけてしまいそうだからである。もちろん少年同士の人間関係の問題は描かれているのだが、少年たちであればこそ、過剰な障害にはならず、読者もサバイバル物語に集中できるのではないだろうか。もちろん、作者は読者を楽しませることも忘れてはいない。新たな船が漂着してからは、物語は急展開し、最後には大砲や銃で敵を殺してしまおうという、子供向けとは思えないほどの過激さも含まれている。

ところで、「二年の休暇」を日本では「十五少年漂流記」としていることが多い。この翻訳のしかたは好きだ。内容がわかりすぎて趣が無いという人もいるかもしれないが、本棚に「二年の休暇」と「十五少年漂流記」が並んでいたら、私は「十五少年漂流記」の方を手取るに違いない。かつてアメリカのSFドラマ「STAR TRECK」が「宇宙大作戦」と訳されたような、そんな安っぽさがいい。

大人なつてから読んだ感想とすれば、気になる点はある。漂流者が終盤で出てくるケイト以外男性ばかりである点、フランス人とイギリス人の対立のように描かれている点、黒人の扱いなどである。現代であればいろいろと配慮が必要な部分で、小中学生に読ませるときは、当時の時代背景などを説明してやったほうがいい思われるが、作品としての評価を下げるようなことではないと思う。

それでは、サバイバル物語としてみた場合どうだろうか、食料・猛獣・冬の寒さなど問題は目白押しである。ワナや地雷といった小道具も充実していて楽しませてくれる。私はサバイバルに詳しいわけではないので、個々のエピソードがどのくらい現実的なのかはわからないが、少なくとも素人目にはよくできたサバイバル物語だと思えた。息抜きに音楽やスケートもあって、ただ生き残るだけ为目的にしていけないのも、むしろサバイバルの厳しさを際立たせているのかもしれない。人数が十五人というのもポイントだろう。日本映画「七人の侍」ではないが、集団を描く場合、主人公グループの人数はせいぜい六、七人のことが多いのではないだろうか。人数が多いと読者も覚えきれないし、書く側も大変そうだ。しかしこの物語ではあえて大人数にして役割分担をさせることで、物語の幅が広がっているように感じられる。投票による選挙などは大人数ならではのエピソードだろう。大人数をうまく描き分けているのはさすがベルヌである。

「十五少年漂流記」は、やはり長年世界で読み続けられている作品だけあって、大人が読んでも十分楽しめる作品だった。少年たちだけが無人島で生き抜くという、多少無理のある設定も、それに違和感を感じさせないところが、繰り返しになるが、さすがベルヌである。

メモ

ジュール・ベルヌ フランスのSF作家「月世界旅行」子供向け

原題が「Deux Ans Vacances」(二年の休暇)

主人公 少年 十五人。子供とは思えないの能力、少年たちの成長

事件：人間関係の問題、食料、猛獣、冬の寒さ、音楽、スケート選挙

ジャックのしわざ、新たな船が漂着、大砲や銃で敵を殺す

小道具：ワナや地図

漂流者が男性ばかり

フランス人とイギリス人の対立

黒人の扱い

〈主題〉なぜ少年十五人を主人公にしたか↓結果、成功している